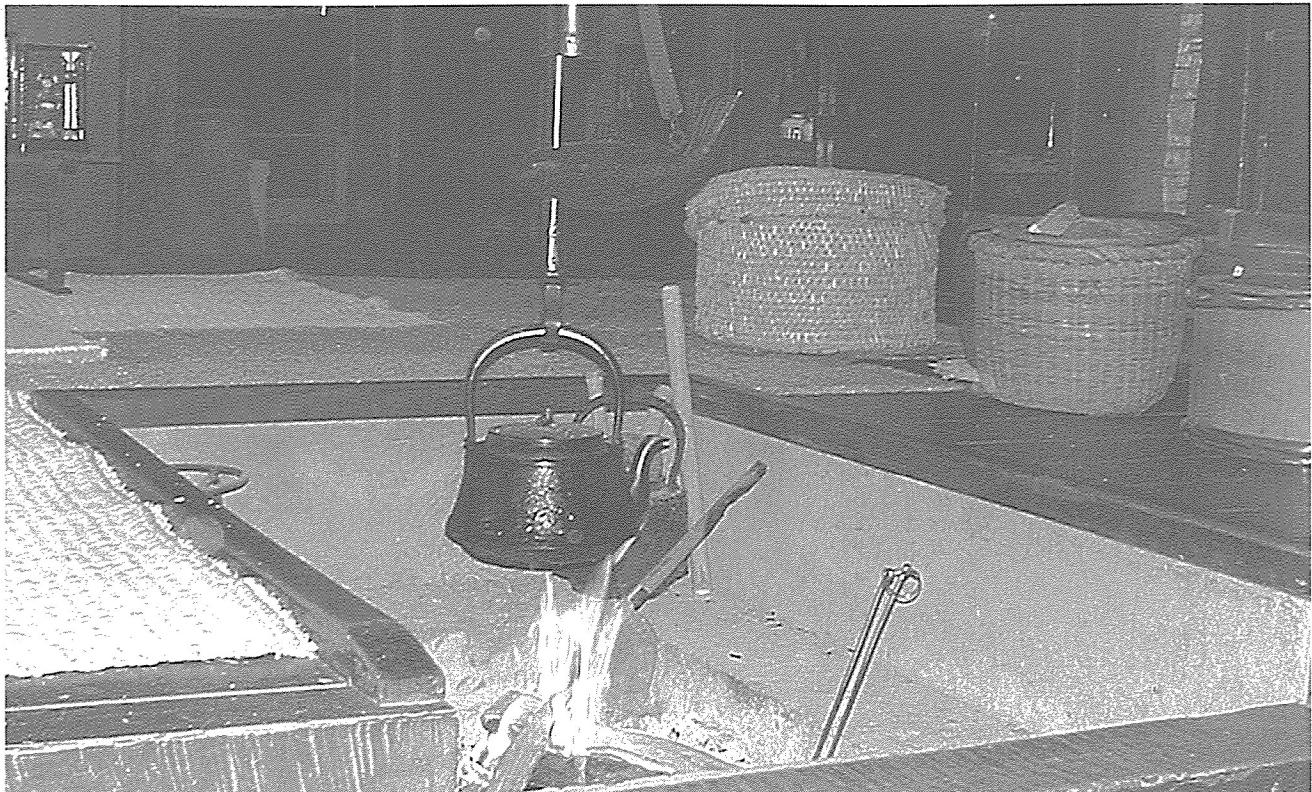


生活の伝承 14

発行者 民家園のつどい
会長 斎藤久一
発行所 福島市五老内町3番1号
福島市教育委員会文化課内
民家園のつどい事務局
TEL(024)535-1111 内線5373



ふるさとの匂い

炉の火がくすぶると
火吹竹でおきを吹く
パツと燃えあがる炎が明るい
火箸と十能がいろりの隅にねている
火棚の中ほどにさがる自在かぎには
鉄瓶がかかっていて
こびるに食い残した焼飯は
わたしの上に並んでいる
横座の側の付木箱がひっくり返ったまま
客座の座布団も片付けられない
流し前の戸棚のあたりで
パタパタと母が動き出すと
夕食はもうすぐ
片付け始める
庭で墓仕事をしていた父も
やがて家中がそろうと夕食
食事のあと
爐ばたで聞く祖母ちゃんの昔話は
ふるさとの匂いがあった
爐ばたには
いつまでも続いて

さいの神の話

秋山政一

一、さいの神の名前

小正月中の行事である「さいのかみ」について、手元にある資料によつて列記してみると次のようになる。いずれも現在行なわれているものは少なく、多くは記録だけのものとなつてゐる。

「さいの神」という行事の呼び名となつてゐる「サイ」には、歳(才)・齋・幸・財など漢字があつられていて、「さえのかみ」と呼ぶところからは、塞の神の字をあて内容もそれに合わせていることが多い。

また、行事の内容からみて「さいのかみ」に関わりのある名に、とんど

とんど焼　さぎつちょ(左義長)　おく。

んべやき　さいとやき　とり小屋　さんくろう(三九郎焼)などの名がある。

この小正月行事は、そのいづれも、さきにみた「さいのかみ」の行事に似ていて、年の暮に迎えた正月の神を、正月の終る小正月に火をかけてお送りする行事となつてゐる。

二、各地のさいの神

秋田県庄内地方では正月十五日塞の神を祭る。七十五才位の男児が藁や竹木で小堂を作り、堂の中に巨大な陰陽型を安置して神体とし、人びとの礼拝をうける。児童は御神体をたゝきつ、祝言をのべる。夕暮時、藁をたいて餅と米を煮て粥として食べ、終つて家に帰る。

山形県の東田川郡立谷沢の村では、正月十五日までに家々で(細木をけずつて書く)を作り「さいのかみ」として三月三日までまつっておく。

福島県伊達郡国見町では、正月に飾つた松や幣束・注連縄は、鎮守様に送られ十五日に火で焼く。

このことを「ドンド焼」という。この火にあたると身体が丈夫になるといふ。

福島市田沢地内の字石内の集落では一月十四日の曉、正月に供えた御幣・しめ縄などの飾り物を集め、毎年やつてゐる村はずれの田の中に栗の木・青竹・繩・藁・藤網など持ちよつて高い塔を作り、中に正月の飾り物などを入れておく。これを「さいのかみ」といつた――さきちようともいつたといふ。日が暮れると、この「さいのかみ」に火をつけて燃やす。その火で餅を焼いて食う。これは病をふせぐといつてきた。

福島市では、明治の初めまで「ドン焼」があつて「一月ノ十五日ノ曉藩士一同ノ分門松　木剣　ケヅリカケ等ノ一切ヲ一つ所ニテ焼去ルコレヲドンドン焼キト称ス」と記された文書がある。高橋忍南松風記に記されていて、明治以前に「ドン焼」といて「さいのかみ」の行事を行なつていたと思われる。

福島県耶麻郡北塙原村では「才の神」といつてゐる。十四日までにメ縄や門松、松飾りなどの正月の供物を集めてきて、青年たちが、心棒の松に青竹をそえて塔を作り、十五日の夜になつて、その「才の神」に火をつけて燃やす。この火で餅を焼いて食うと虫歯にならないという。煙草の火にしてのむのもよい。

福島県安達郡白沢村では、正月十四日までに、各組毎に竹・繩・藁などを持ちよつて「鳥小屋」を作る。十五日の日に、家々では松飾りなどを持ちよつて鳥小屋に集まり、火をつけて鳥小屋を焼く。その火で焼いた餅を食うと風邪を引かないといつて食う。

耶麻郡山都町では、十四日の前日まで古い神札・門松・注連縄・藁・正月飾りナットウト(納豆を包んだ藁包)等を集めて、地方で決まつてゐる田に集めて高い塔状の「さいのかみ」を作り、作つて塔の上部につける。

夕食後、村人が集まると、この「さいのかみ」に火をつけて燃やす。この火で焼いた餅を食うと病気にならないという。

耶麻郡磐梯町は私の故郷で、私の少年時代に私の体験した「さいのかみ」の行事を記すと次のようになる。

1 門松集め

一月十三日から十四日の午前中までに、小学校の高等科一年の男子が親方となり四年生以上の男子が山神社に集まり、親方から門松集めの仕方を教えてもらう。

集落別に当番をきめて四～五人が一

団となつてさいの神の藁をもらいに出とばを高声でいって歩く。

『さいの神の 藂くんつえ（歳の神の藁下さい）』 声をそろえて叫び続けて通りを歩くと、家々では、正月飾り（しめ縄 お札 供え物など）や藁たばを出してくれる。藁を出すことのできない家では、お金（五銭とか十銭ぐらい）を駄賃といつて渡す。

この金は、終つた後に親方から参加した者に分配された。

2 さいの神作り

子供たちが集めた門松や松飾りと、青竹、藁をもつて さいの神 を二つ作る。このさいの神作りは青年団の人たちが受持つ。

青年たちが切つて来た孟宗竹を芯にいの竹を巻きしめて高さ三～四mの円錐塔を作る。塔の最上部に男女の陰陽物を作りつける。これが出来上がると解散する。

3 さいの神焼き

夕食後、村の人びとは子供たちと一緒にさいの神の下に集まる。この時、家々では十四日の日についた餅を竹棒

の先につけて持ちよる。

おおむね人びとが集まつたと見ると、青年の人が、さいの神の根元の方へ火をつける。燃え上がるのを見上げて、次のことを見そろえて高声に叫ぶ。

「ぢいさまと ばあさまと

やつきやれ（焼けやれ）

やつきやれ（焼けやれ）

やつきやれ（焼けやれ）

最上部のあたりが焼け落ちた頃、叫びを止めて、持つて来た竿の先につけて餅を焼きにかかる。この餅はその日（十四日）についた餅でなければならぬ。ここで焼いた餅は持ち帰つて家族一同に分けて食う。この餅を食うと病気にならない。あるいは「のうやみ」はしないといつて守つている。

山梨県東八代郡新井原村では トンドン焼 といい、松飾りを集め 村はずれにて焼く。

鳥取県では、辻に竹や藁で塔状のものを作り、火をかけて焼く。この時、

藁の馬に団子を背負わせて行つて、その団子を焼いて食つた。その時に、燃えている「さいのかみ」の周りで囁すうたに次のものがある。

さいの神さま十五日

おせたちや参るに
子供たちや参らんか

下駄がなけりや
かしてやるわ

新潟県塩沢村では、正月十五日には、子供さいのかみの勧進をする。それは、桶の木を上下両方から削りかけにし、鍔の形にし「ます棒」と呼び、大小の二本を作り刀の大小に似せて腰にさした。子供に一升枡を持たせて民家を廻り、「さいの神の勧進だ 錢でも金でも クワックワツとおやれ」と言い廻るという。

これは私見であるが、正月十四日の二本を作り刀の大小に似せて腰にさした。子供に一升枡を持たせて民家を廻り、「さいの神の勧進だ 錢でも金でも クワックワツとおやれ」と言い廻るという。

これは私見であるが、正月十四日の二本を作り刀の大小に似せて腰にさした。子供に一升枡を持たせて民家を廻り、「さいの神の勧進だ 錢でも金でも クワックワツとおやれ」と言い廻るという。

これは私見であるが、正月十四日の二本を作り刀の大小に似せて腰にさした。子供に一升枡を持たせて民家を廻り、「さいの神の勧進だ 錢でも金でも クワックワツとおやれ」と言い廻るという。

長野県飯山町では、正月十五日になると家々で神様をまつた門松や注連縄や幣束を集め、幸の神の家を作り村人が参詣する。夜になつて、その幸の神に火をつけて焼く。その火を家に持ち帰つて小豆粥を作つて食う。

しかし「さいのかみ」の行事は、先にみてきたように年末に自分の家に迎えた「正月の神」を、十四日の晩に「お送り」をするという行事であつたと考えることができる。

隠岐島都万村では、子供が正月の松飾りを集め、村の大人がトンドを作る。トンドというのは小正月の火祭りのことである。

集めた松飾りなどは中央に竹を立て、

それを松飾りなどで囲むように締めて、四方に網を張る。

やがて塔のように立てた松飾りを、浜の方と山の方で引き合う。山側に倒れ、ば田畠作が豊作、海側に倒れ、ば

海の豊漁として占う。

升・杵

四景

村田精治

一、御上米の節下役共の取斗らひち難儀仕候、慈悲をもつて、米盛秤分

(下略)

は御収納の外一切相用候柵三無御座候間格別の御憐愍を以御聞済大庄屋代役為御立会御藏柵と御計競被下置候處入目相違無御座ニ付御焼印の上御渡被下置難有……、

ほなどうたひ可レ申者也、
年貢皆済ならば、正月用意いたし、
残米を餅につき、酒をもつくり、塩さかなをもかいもとめ、目出度年を取べき也、正月は我人ともに、高砂や此うら舟に帆をあげて、月もろともに出しある。

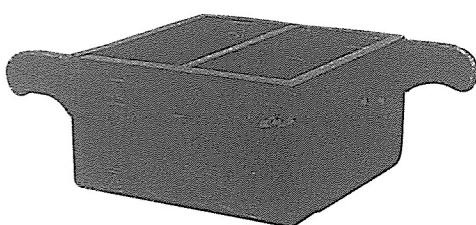
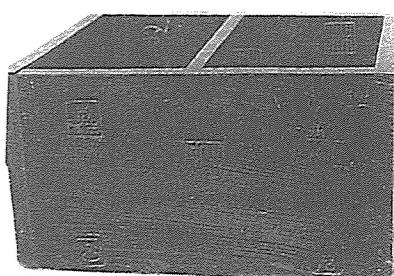
升に興味を持ったのは、一斗升（握手・弦鉄つき角型）を購入したが、その升が文献にのつていなかつたからだつた。変つている点は弦鉄が対角でなく平行、焼印が四十六個と多いことだ。

判明したのは、日本計量史学会の調べで越後高田藩製のものということである。高田藩は江戸の升を使用せず、明治まで自藩の升を使用した藩の一つであつた。（この升について詳細は調査中。写真一下）

以下は升について資料より抜粋したものである。

四月最中、男は未明迄暮まで、鍬のさきのめり入ほど田をうなぶべし、女房娘は三度之めしをこしらへ、頭にあかき手巾をかぶり、田の辺へ持行、老若共に、よごれたる男の前へ食をすゑべし、あかき衣装の女房を若老共に男

- 一、小倉村にて斗柵式挺五升柵式挺外五ヶ村は斗柵壠挺つ、損じ柵補理村々為御救人目請御改右柵相用候様被、仰付被下置度旨……、右柵



銅取り鉄切惣而下役の儀村々百姓共両問屋上総屋下代何レモ羽織袴ニ而三ヶ所共ニ帳面ニ相記し御廻し之節者、上総屋下代羽織袴ニ而柵取りいたし切米ニ相成候ハバ……、

二百文余も相掛り……凶作打続き百姓共自然と行詰り……、

資料2、「桑折町史」六

資料3、「福島県史」三・八

資料4、「一国訴状記・佐渡」（写し）

資料1、始め、結びは「史料による日本歩み」より会津藩上杉氏の家臣、直江兼続『四季農戒書』

資料1、「収納米斗立候節、古來之通 竹指懸ヶ八寸廻り節なしの竹、相用可申候事」

「藏番共米改之節、大竹之さしを用ひ候義無用、自今竹さし式寸廻り不可過、尤ふしを込可申候、」

居候の一生

熊本俊光

「トツツア」と呼んでいた。生まれは安達郡の或る村で、白い米藏が二つもある財産家の長男であつたが、これがなか／＼の遊び人であつたらしく、二十代の若さで勘当されてしまつたのである。その後、どんな職業を転々としたかは知る由もないが、私が小学校に入る頃は既に私の家で働いていた。

「トツツア」は、一年中我が家で働いている訳ではなく、農家が忙しくなる四月から秋祭りの終わる十一月一杯迄の八ヵ月間で、残る四ヵ月は「門付け」、平たく言ふと「乞食」をして東北関東地方を縄張りとして歩くのである。

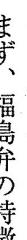
当時父は、村ではいろんな役職を預かっていたので外聞を気にしていた。それで「トツツア」には、いつも村から遠く離れた所で乞食をするよう注意していた。だが、それにも拘わらず、村をくまなく一巡するどころか、毎日顔を合はせて挨拶を交

す隣近所から回るのであるから、父は毎年これには怒り心頭に発していた。

「トツツア」の泊る所は、「木賃宿」と言ふ商人宿で、米を宿賃代わりに支払うのである。

このような暮らしを我が家で二十年以上続けていたのであるが、齢六十才近くになつた或る日、「トツツア」は母に風邪気味で体調が悪いから四五日休ませて貰ひたいと言つて、床についてから五日目頃に何等苦しむこともなく眠るようにこの世を去つたのである。

わたしは、この「生活の伝承」第10号に、「福島方言の標本から」という拙稿を掲載させて貰いましたが、またぞろ性懲りもなく、いつも使つている「方言—福島弁」のことを並べますので、ご笑読ください。



まず、福島弁の特徴その一是、共通語で表現している「一られた」の部分

を「ラッチャ」と発音することです。
さらに「一られて—一られた」の場合は「一ラッチ—一ラッチャ」の用法で会話を成立させていることです。

たとえば「ほめられた」とするのは「ホメラッチャ」、「盗まれた」は「ヌスマッチャ」、「泣がれた」のときは「ナガッチャ」、「民家園の仕事を頼まれた」と言うのを「民家園ニ仕事タノマツ

チヤ」という形です。

いくつかの用法は次の通りです。

○言われた—ユワッチャ

○乗せられた—ヌセラッチャ

○疲れた—ツカッチャ

○濡れた—ハナッチャ

○くたびれた—クタビッチャ

○離れた—ハナッチャ

などなど。ここで疲れたやくたびれた、離れたの言葉を普通の会話の中に混在させて喋つたりしていますと、他所からの人達や子どもたちには、さっぱり理解できない外国語のように耳にひびいていることでしょう。

○「仕事片づけつかど思つて頑張つた

その前途に合掌して終わりたい。

古代中世の言葉など —わたしの福島方言採集標本(その二)—

太田隆夫

福島弁に見られる
古代中世の言葉など

○「あの角のところを来たら降りてきで、ヌッチャ、ヌッチャ」
それで「—られて—られた」の場合を耳をすませてみると、「怒られて立たされた」は「オゴラツチ・タダサツチャ」であるし、「飲まされて泊められた」の場合は「ノマサツチ・泊メラツチャ」だし、「箒で叩かれて追い出された」という事態では「ハダガツチ・ブン出サツチャ」と、報告形式で話したりしています。

同じような用法で、「ゴミ流れてくるのです」では「ゴミ流ツチクンデス」と苦情を訴え、土地の伝説を訊かれたときなどは「ツテ伝エラツチエンノナイ」と、おばあさんは丁寧に案内したりしています。

◆◆◆

特徴その二是、「エ」というのを「ゼ」と発音してしまうことです。エというほか、良い、善い、好いの変化の「イイ」の場合も「ゼ」と発音して話題としていることです。

寒い季節の必需品「襟巻」は「ゼリマキ」(新世紀の現代はマフラーが一般的です)と言つていましらし、飼つていた猫や犬、鶏から農馬、牛の餌は「ゼバ」と言い、ペットフードとか飼料という言語で処理してしまうことは滅多にありませんでした。

小正月の団子さしは、水木の枝「ゼタ」に飾り、海老(蝦)は「ゼビ」だつたし、恵比寿講は「ゼビスコ」と発音して、支障もなく通用していました。

○えびら(蚕に繭を作らせるマブシ)に程よく—ゼエクレ
○縁側—ゼンガ
○榎—ゼノギ
○家の前庭—ゼエノメエ
○いい天気—ゼエテンキ
○いい搭配—ゼエアンベ
○いいでしょう—ゼエベシタ
○行かなくともいい—行ガントモゼエ
○蝦夷内(地名)—ゼドウチ
○胞衣荒神さま—ゼナコオジンサマ
○えぐい(味覚えごいとも)—ゼゴイ
福島弁の特徴その三として拾つてみると形容詞としての語尾に「コイ」とか「ポイ」がつくことです。

◆◆◆

特徴その四是、推量とか催促、せきたてるときの形式で、「もう」「さあ」「そろそろ」の意味を含ませて話すとき、語尾のところに「ハアー」という終詞が無意識のまま使われていることです。

○ゆるい—ユルコイ
○優しい—ヤサシコイ
○平べつたい—ビツタラコイ
○小さい—チンチャコイ(チツチャコイ、チャンコイ、チンコイなど)
○噛み切れない肉、沢庵など—シナコイ
○程よく—ゼエクレ
○えびら(蚕に繭を作らせるマブシ)に程よく—ゼエクレ
○縁側—ゼンガ
○榎—ゼノギ
○家の前庭—ゼエノメエ
○いい天気—ゼエテンキ
○いい搭配—ゼエアンベ
○いいでしょう—ゼエベシタ
○行かなくともいい—行ガントモゼエ
○蝦夷内(地名)—ゼドウチ
○胞衣荒神さま—ゼナコオジンサマ
○えぐい(味覚えごいとも)—ゼゴイ
福島弁の特徴その三として拾つてみると形容詞としての語尾に「コイ」とか「ポイ」がつくことです。

◆◆◆

特徴その四是、推量とか催促、せきたてるときの形式で、「もう」「さあ」「そろそろ」の意味を含ませて話すとき、語尾のところに「ハアー」という終詞が無意識のまま使われていることです。

「山ハ雪ダベハアー」は、山の方はもう雪が降つてゐるでしょうかの意味。「バス行ツタベガハアー」は、バスはもう行つたろうか、その答えは「バス行ツチマツタヅイハアー」で、すでにバスは発車して行つたよ、と納得させています。

「起ギロヨハアー」で、朝仕事に田畑へ出て、夕闇が迫るころは「シマベハアー」とか「終ツペハアー」と、家に帰つて来たのが、すぐこの間まで農村に見られた普通の暮らしの姿でした。長くなりますが、この項目も「幕シメッペハアー」といたします。

◆◆◆

民俗学者の柳田国男は、「方言周囲論」の記述から、日本の古代、中世の言語は政治とか文化の中心地よりも遠い地域ほど、昔の姿のままその言葉の形態が残つていて、いまなお名詞や会話に採集できるとしています。

弱々しく发声して來たのでした。
「マンマ食ウベハアー」というのは、そろそろ御飯にしようということで、「マンマニシツペハアー」と言つたりします。

「もう満腹です」の場合は「腹クツチヅイハアー」とか、「沢山ダヅイハアー」と発言して、追加分を遠慮したり、断わつたりしています。

「山ハ雪ダベハアー」は、山の方はもう雪が降つてゐるでしょうかの意味。「バス行ツタベガハアー」は、バスはもう行つたろうか、その答えは「バス行ツチマツタヅイハアー」で、すでにバスは発車して行つたよ、と納得させています。

「起ギロヨハアー」で、朝仕事に田畑へ出て、夕闇が迫るころは「シマベハアー」とか「終ツペハアー」と、家に帰つて来たのが、すぐこの間まで農村に見られた普通の暮らしの姿でした。長くなりますが、この項目も「幕シメッペハアー」といたします。

京都や江戸から遠く離れている九州、琉球、そして奥羽の地の私どものところに、その古い言葉が面影を伝えていきます。確かに福島弁のなかにも少し形をかえていくつか拾うことができます。

まずその例が、蜂のことを「スガリ」と言っていますが、これは万葉集にもある言葉として知られています。そして蜂は、胸と腹のさかいが細いので「腰細のスガルオトメ」と美少女を表現している和歌もあります。

青森県の生れの作家太宰治や、歌手吉幾三の故郷の津軽地方の乙女かと思われる発音ですが、全くはずれています。

おなじく昆虫で、とんぼ（蜻蛉）のことを「アケズ」と言つたりしますが、平安時代までアキツと発音していた名残りが福島地方に細々と伝承されてきているようです。

○セナ（セナサマ）——兄。姉妹からみた兄弟、結婚の相手の男→妹（いも）の対

○シャデ——弟。舎弟、宮本武蔵の相手として決闘した京の吉岡道場の舎弟は傳七郎。

○タリヒ——つらら。垂氷（たるひ）。○エシヨ——衣裳。着物のことと、晴れ着を「アガイシヨ」といつています。

○バッチ——末子。ばっしが訛つたもので「バッチコ」と言つて可愛さを強調したりしています。

○エサバヤ——魚屋のこと。五十集屋と（な）獲り場、磯魚（いそな）獲り場から魚を商いに来る人を表わす。万葉集では海や浜にかかる枕詞で「イサナトル」と使われています。

○ホイドー乞食、物ごい人。陪堂（ほいたう）と書き、禪宗で僧堂の外で陪食を受けること、僧や山伏が修行として托鉢し、乞食（こつじき）することから、一般に物ごいする人に転訛して使われました。

○リンキー——やきもち、嫉妬のこと。格気と書き、江戸時代に多用されています。

○マデ——念入り。古語のマテ、マタシからまじめ、律儀、完璧、馬鹿正直、実直の意。

○カダチアメ——タ立、雷雨。神立ち雨、おかんだちの言葉から。戦国時代に伊達政宗が安達・安積地方で合戦した時、日記にも「カタチ致し候」「カタチあり」の記述がいくつか見られます。

○オドゲ——あご、顎。下顎のことを「頤」と書くことから転訛しました。昆虫のショウウリョウバッタのこと、書かない。

○オオガマシ——大水、大洪水。大川増した。

○オオガマシ——大水、大洪水。大川増した。

○オドゲ——不平、愚痴。世迷言のこと。嫁さまの事ではないことは確かです。

○スゲネ——物さびしい、つれない。素氣ない、味気なく面白くない、愛想もなく薄情などの意味多岐です。

○バッチ——末子。ばっしが訛つたもので「バッチコ」と言つて可愛さを強調したりしています。

○ゴスギ——結婚式。御祝儀の転訛。

○ブチホ——粗相、失礼。不調法の転訛。

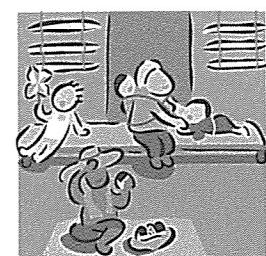
○フダ——沢山、十分にあること。ふんだん。

○ホマチ——へそくり金。穂待、外持と表記し、奉公人が落ち穂や、商い手伝いの中で一定の金銭以外に貯えた金。また船乗りが出帆を待つ間にかせぐ金とも、帆待。

○ワダマシ——新居に移り、火伏せ（ヒビセ）の神事のこと。渡座、わたりまし、貴人の転居の尊敬語。御輿の渡御のことと同じ。

○ドデン——驚く、びっくり、ドデンしました。動転、動顛で、驚きあわてる、非凡なこと。東海道中膝栗毛には、頭、かしらの意味で表記されています。

○ネズイ——熱心、まじめ、ねちこい。古語では丁寧、念入り、くどいことで表記されています。



○オツカネエ——恐ろしい、怖い。負気甚し、おけなし、畏れ多いという意味から訛つてオオケネエ、オツカネエとなり、畏るから恐る、怖がる、恐怖に変つたとも。

○ナズキ——ひたい、額。古語では脳の部分の総称のナヅキから。東海道中膝栗毛には、頭、かしらの意味で表記されています。

○ドデン——驚く、びっくり、ドデンしました。動転、動顛で、驚きあわてる、非凡なこと。東海道中膝栗毛には、頭、かしらの意味で表記されています。

○ナズキ——ひたい、額。古語では脳の部分の総称のナヅキから。東海道中膝栗毛には、頭、かしらの意味で表記されています。

○オツカネエ——恐ろしい、怖い。負気甚し、おけなし、畏れ多いという意味から訛つてオオケネエ、オツカネエとなり、畏るから恐る、怖がる、恐怖に変つたとも。

○ナズキ——ひたい、額。古語では脳の部分の総称のナヅキから。東海道中膝栗毛には、頭、かしらの意味で表記されています。

○オツカネエ——恐ろしい、怖い。負気甚し、おけなし、畏れ多いという意味から訛つてオオケネエ、オツカネエとなり、畏るから恐る、怖がる、恐怖に変つたとも。

「つどいの会」に感謝状

齋 藤 久 一

平成十四年十月二十日、私どもの
「民家園のつどい」の会に開園二十
周年を記念して、福島市長から栄誉

ある感謝状と記念品をいただきまし
た。

感謝状は当日午後一時、旧広瀬座

す。

の舞台で並み居る観客と一部の会員
が見守るなか、会を代表して会長の
私が、記念品の目録は太田副会長が
いたときました。

顧問の秋山先生には席上、市長か
ら功績を讃えるお言葉がありまし
た。

謝辞をということでしたので、は
しなくも次のようなことを申し上げ
てしましました。

事には元気でご参加できますよう
願っております。

誰に相談することもなく独断と偏
見で、しかも一夜漬けもメモ書き

だつたので、ここに改めて遅れ馳せ
ながら、その内容を記し会員皆様に
ご了承を願つておきたいと思いま
す。

なお、感謝状は管理棟内研修室の

東南壁に掲げました。

また、記念品の中味が気になつて
仕方ありませんでしたが、年内中
に配付されましたので、有り難く
ホツとした次第であります。

ここに民家園開園二十周年記念
伝承に多大の貢献をられました
にあたり深く感謝の意を表します

平成十四年十月二十日

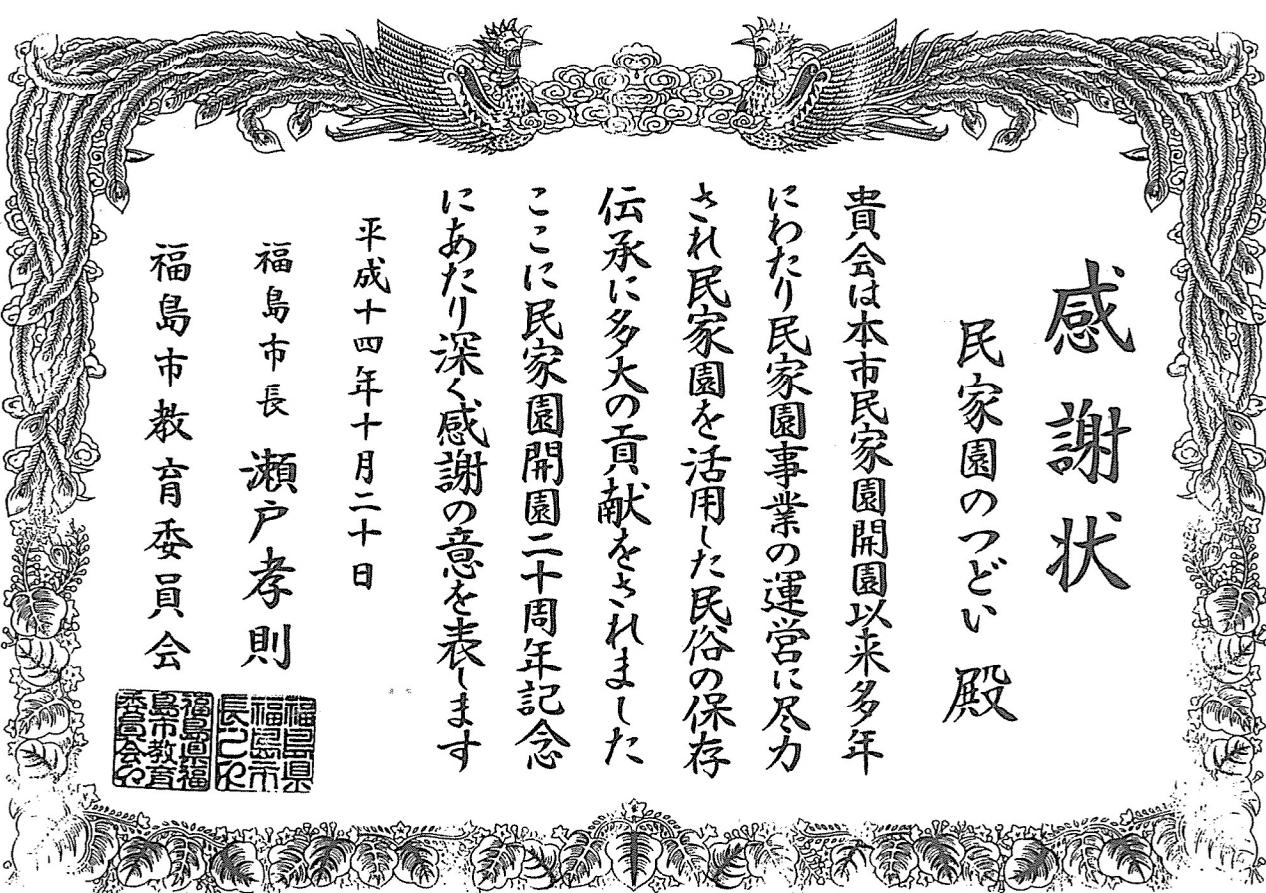
福島市長 濱戸孝則

福島市教育委員会



感謝状

民家園のつどい 殿



— 謝辞 —

只今は市長様から、私共「民家園のつどいの会」に栄誉ある感謝状と記念品をいただきまして、誠に有り難うございました。

私達「つどいの会」は当初、福島市教育委員会が昭和五十六年から開講されました「文化財指導者養成講座」で、今は亡き諸先生などから、文化財の重要性についての講義を受講した人達が、主として会員となつて発足いたしまして、現在の登録会員は約百名に達しております。

それは、その講座の中で特に秋山政一先生の民俗学についての講義に心ひかれ、言葉はよくありませんが、すっかり洗脳された者達でした。些か私事になりますが、私は川崎市に叔父がおつたので、川崎市にある「日本民家園」は三回程見学しておりますが、ここでは一方通行で上に上がつてはダメ、展示品に触つてもダメでした。それが「日本民家園」だったので、最近はボランティアガイドもやるようになつたと聞いてあります。

時に昭和五十七年、この民家園が開園されるに当たり、福島市の民家園は家中に入つたら、自由に上がりつてみ



られる、そんな民家園こそ社会教育の施設ではないか、この家にある諸道具や調度品に触れてこそ、この家に住んでいた先人達の生活を偲ぶよすがとなるのではないか。そして、この民家で実際どんな暮らしをしていたのか、それを再現するため、年中行事をやってみてはどうかなどと話し合つたものでした。幸い秋山先生も非常に乗り気で、市教育委員会も特段の理解を示されました。

そこで、開園二十周年という節目の年を迎え、昨日は常陸宮殿下ご夫妻のほかの役員を選出し現在に至つております。そして、開園二十周年という節目の年を迎えて、昨日は常陸宮殿下ご夫妻のほかの役員を選出し現在に至つております。

それにいたしましても、このように運営されておりまることは、市ご当局のご理解ある予算措置等のお陰と、常々感謝しておるところであります。お今後とも年中行事等を通じ全国に発信できる民家園にして行く可く、会員一同頑張つて参る所存でありますので、市ご当局におかれましても、更なるご理解とご指導ご支援を賜りたくお願い申し上げまして、感謝状授与に対し会員一同を代表し御礼の言葉と致します。誠に有り難うございました。

平成十四年十月二十日

福島市民家園のつどい会長

齋藤久一

そこで、そのためには私達もボランティアとして協力しますということになりましたことは、大変喜ばしいことあります。

来園者に開放し、年中行事を再現し、昨年からはボランティアガイドも発足しました。私共はこの民家園を愛し、生きた民家園として今後とも行事運営に参画して参る所存でございます。

この民家園こそは全国的にも類例のない、名実ともに日本一の民家園だと会員一同自負しておるところであります。

それにいたしましても、このように運営されておりまることは、市ご当局のご理解ある予算措置等のお陰と、常々感謝しておるところであります。お今後とも年中行事等を通じ全国に発信できる民家園にして行く可く、会員一同頑張つて参る所存でありますので、市ご当局におかれましても、更なるご理解とご指導ご支援を賜りたくお願い申し上げまして、感謝状授与に対し会員一同を代表し御礼の言葉と致します。誠に有り難うございました。



昭和五十七年八月一日に福島市民家園が開園して、本年で二十年目を迎えました。これを記念し、八月一日から四日を記念週間として、べこぞうり作りや裂き織体験など行ないました。十月には記念事業として、十九日に県指定重要無形民俗文化財「檜枝岐歌舞伎公演」、二十日に「民家園のつどい」への感謝状贈呈式及び俳優常田富士男講演「日本昔ばなしの世界」を旧広瀬座において開催いたしました。

記念事業では、うつくしまねんりんびつく総合開会式へご出席される常陸宮ご夫妻が、公演を観覧されるため、民家園を来園され、また、二日間に渡り園内各民家で様々なか体験行事も行なわれ、

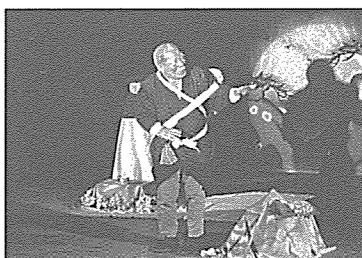
申し上げます。

昭和五十七年八月一日に福島市民家園が開園して、本年で二十年目を迎えました。これを記念し、八月一日から四日を記念週間として、べこぞうり作りや裂き織体験など行ないました。十月には記念事業として、十九日に県指定重要無形民俗文化財「檜枝岐歌舞伎公演」、二十日に「民家園のつどい」への感謝状贈呈式及び俳優常田富士男講演「日本昔ばなしの世界」を旧広瀬座において開催いたしました。

記念事業では、うつくしまねんりんびつく総合開会式へご出席される常陸宮ご夫妻が、公演を観覧されるため、民家園を来園され、また、二日間に渡り園内各民家で様々なか体験行事も行なわれ、

申し上げます。

今後、旧広瀬座について、本市のみならず近隣の町村を含めた幅広い活用をしていくため、様々な方法を模索して事業を行なっていく予定ですので、園内行事とともに盛況の内に終えることができました。各種体験を通して、子供からお年寄りまで世代をこえて交流があり、有意義な民家園事業になつたのではないでしょうか。



福島市民家園 開園二十周年記念事業

